



対談

## 塩川正十郎さん・紺野美沙子さん

### plan-do-seeが鍵を握る これからの社会貢献

**遠山敦子前会長からバトンを受け継ぎ、  
全日本社会貢献団体機構新会長に就任された塩川正十郎氏。  
国連開発計画(UNDP)親善大使を務める女優の  
紺野美沙子さんが、社会貢献のあるべき姿を聞いた。**

**紺野** 最近、企業や団体の社会貢献ということが話題になりますが、先生は、この傾向についてどうお考えでしょうか。

**塩川** 社会貢献や、ボランティアなどの奉仕活動は、自らの自覚のもとに行うというのが本来の姿でしょうね。





それをプロパガンダに利用することは間違いです。自然な形で行われる貢献や奉仕というものは、実にいいものだと思います。

**紺野** その趣旨に賛同してくださる方々がいて、みんなでやろうという形になるのが理想的ですよ。

**塩川** あなたもチャリティやボランティア活動などの司会や進行役で呼ばれることが多いでしょう？

**紺野** 時間が許すかぎり、うかがうようにしています。

**塩川** 企業にしる、団体にしる、社会貢献というものは、余裕があればやればいい。無理をしてはいけません。無理をすると、どうしても宣伝のためということになりがちです。奉仕したことに対して見返りを期待してしまう。

**紺野** それで見返りがないと、すぐに止めてしまうところもあるようですが。

**塩川** 社会貢献は、一過性であってはいけません。やはり、継続が大切です。というのも、一度実施したら、それに関係する人たちは次を期待して動くことになります。ですから、始めるときには継続を前提に、きちんとした準備をして始めるべきです。思いつきでやるのは意味がないし、継続しません。

**紺野** 「継続は力なり」とよくいわれますが、こと社会貢献やボランティアといったものは、継続することに意義があるのでしょうか。

**塩川** 紺野さんは国連開発計画の親善大使をなさっていると聞いていますが、もう長く続けられているのですか。

**紺野** はい。今年で10年目になります。アジアやアフリカなどの開発途上国を援助する機関ですが、日本国内では、まだまだ認知度が低いですね。10年たって、やっと少しは認知されて

きたのかなという感じです。国際協力にしる、開発援助にしる、ひとつのことを形にしていくには、やはりそれなりに時間がかかるということを実感しています。細く、長くをモットーに、これからも続けていきたいと思っています。

**塩川** 結局、なぜ、社会貢献や社会奉仕に継続が必要かという、継続することで、いい情報が入ってくるからです。その関係者や、その活動に触れた人などから、有用な情報をもたらされる。そういった情報の上で立つて、さらにその活動を充実させることができるのです。逆にいえば、継続しないと必要な情報も入ってきません。

**紺野** 情報というのは、つまり人間関係が大切ということでしょうか。

**塩川** そうそう。その人間関係が、最近は希薄になりつつあるね。

**紺野** 社会貢献や奉仕活動をさらに充実させていくという意味では、それをする側が、その結果どうなったかということをしっかり把握しておく必要があるように思うのですが。

**塩川** おっしゃる通り。かつて私が経験したのですが、エチオピアで内戦があったときに、国連からの要請で、毛布を集めて現地に送った。3万枚か、4万枚あったと思います。数ヶ月後、その結果がどうなったか、現地に視察に行きました。ところが、毛布がエチオピアの人々に届いた形跡がない。空港には着いたらしいのですが、そこから先、どこに行ったのかわから



ない。どうも空港を占拠したゲリラ側によって売り飛ばされたらしい。ですから、国際援助や支援というものも、きっちりとしたコネクションや準備の下で実施しなくては、何のためにやったのかわからないということになる。

**紺野** かつては日本の政府開発援助

なども、箱モノだけを作って、あとはそのまま。実際には現地の人々の役に立っていないという批判がありました。最近、NGOの方々と協力したりして、きめの細かい援助をするようになってきましたね。昨年、親善大使として訪れたカンボジアのコンボンチ

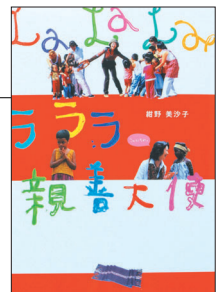


カンボジア・コンボンチ州に、日本のODAによって掘られた井戸で水浴びをする子どもたちと。日本の技術を駆使して掘られたこの井戸は、3年間一滴の雨がなくても枯渇することがないという

**紺野美沙子** こんのみさこ

女優、国連開発計画（UNDP）親善大使。1980年、NHK連続テレビ小説『虹を織る』のヒロイン役で人気を博す。テレビ・映画・舞台上に活躍する一方、1988年、途上国の開発援助を行う国連機関「国連開発計画」の活動を一般の方々に広く伝えることを目的とする親善大使に任命される。これまでカンボジア、パレスチナ、ブータン、ガーナ、

東ティモール、ベトナム、モンゴルなどを訪れている。最近、10年間の親善大使の経験をもとにして書いた国際協力の入門エッセイともいえる『ラララ親善大使』を出版。東京都出身、慶応義塾大学文学部卒。



「ラララ親善大使」小学館

ヤム州では、日本のODAで井戸が作られていました。日本の井戸は長持ちするそうですが、ただ井戸を掘るだけでなく、それが壊れたときに修理をするための人材育成や、衛生的に井戸を維持するための教育というものも一緒にやっていて感心しました。

**塩川** そうですか。社会貢献にもいえることですが、やはりハードとソフトをいつも一緒に考えておかななくてはいい。資金や物品などを含め、ついハードの面に目が奪われがちですが、ソフトがついていかないと、せっかくのハードも無駄になってしまう。

**紺野** 援助は必要ですが、援助を受ける側の意識の向上も必要だと思います。井戸を作ってもらいました、橋を架けてもらいました、医療機器を揃ってもらいました……、それが壊れたら、またお願いしますではなくて、自分たちで修理して使えるように一人ひとりの能力を高め、創意工夫することを指導することが大切なのでしょうね。

**塩川** それが、私のいうソフトの部分です。そういうことを考えるのも、大きな社会貢献のひとつだと思いますよ。ですから、ソフトのための費用を惜しんではいけないのです。

**紺野** 先生は全日本社会貢献団体機構の新しい会長に就任なされましたが、会長として、今後どういうことを



やっていきたいとお考えですか。

**塩川** 自分たちができる範囲で、淡々と継続することが第一ですね。それと、機構として、これまでの活動をどう評価し、次につなげていくかです。これまでさまざまなプロジェクトを助成したり、社会貢献をした方々を顕彰したりしてきていますが、その結果がどうなって、どんな効果があったのか、今後、しっかり検証していく必要があるでしょうね。

**紺野** そういう点は社会貢献やボランティア活動の長い歴史がある欧米に学ぶことも多いのではないのでしょうか。

**塩川** 最近、ロックフェラーの回顧録が出版されましたが、それを読むと、そういう評価の仕組みといったものがきちんとできている。だから継続的な寄付や慈善活動のサポートが、実に効果的にシステマティックに行われている。

**紺野** かつては日本にも、そういう方がいらしたように聞いていますが。

**塩川** 個人の篤志家というのは確かにいましたが、いってみればテキサスヒットのようなもの。それを組織として、継続的に行った例は少ないのではないのでしょうか。

**紺野** 日本では、社会貢献に対する評価の基準や仕方、そのシステムができあがっていないということになるのでしょうか。

**塩川** そうでしょうね。やはり直接、利害関係のないことですからね。でも、これからは社会貢献にもplan-do-seeの考え方を取り入れていかなければならないと思います。プランを立て、それを実行し、どうなったのか見きわめて評価する。そしてその結果を、新たなプランにフィードバックしたり、さらに継続的な支援に結びつけ



**塩川正十郎** しおかわまさじゅうろう  
1921年生まれ、大阪府出身。慶応義塾大学経済学部卒。67年の初当選以来、衆議院議員を11期務める。その間、運輸大臣、文部大臣、内閣官房長官、自治大臣、国家

公安委員長、自由民主党総務会長、財務大臣を歴任。現在もテレビ番組などで政治のご意見番として、視聴者に人気がある。現在の主な役職は自由国民会議代表、東洋大学総長、関西棋院理事長など。

たりする。もう少ししたら、この機構でも、それを一度やってみるべきでしょうね。

**紺野** それが社会貢献をする側の責任ということになってくるのでしょうか。

**塩川** 私たちはパチンコホールやスロット店のみなさんからの大切な資金を預かっている立場ですからね。そのお金には、みなさんの善意が込められています。ですから機構が拠出し

た助成や援助がどのように使われているのか、当然、そのことに対する責任は重い。その点を十分意識しながら、今後も活動を継続していきたいと考えています。

**紺野** 今日は、有意義なお話をたくさん聞くことができました。ありがとうございます。

**塩川** 紺野さんも国連開発計画のほうのお仕事、がんばってください。